

[04_8] 図書館情報 : 九州大学附属図書館月報 :
4(8)

<https://doi.org/10.15017/18014>

出版情報 : 図書館情報. 4 (8), pp.41-46, 1968-08-25. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :

図書館情報

1968. 8

The Kyushu University Library Bulletin

Vol. 4, No. 8

ミシガン大学訪問記 — The Asia Library について —

井 上 義 巳

去る3月末から6月末までの3ヶ月、文部省の在外研究員として米・英・西独の主要大学を訪問したが、ここでは約4週間近く滞在した米国ミシガン大学の Center for Far Eastern Studies について、それもとくにこの研究所の中心をなしている The Asia Library の近況について報告させていただくことにする。

あらためていうまでもなく、ミシガン大学の Far Eastern Studies は米国における最も大規模なそして最も注目されるアジア研究所であり、その中の日本研究部は、最近数年がかりで岡山地方を中心とした瀬戸内海地方の地域研究を実施して、日本でもその活動が注目されているところである。筆者は昭和33~34年の1ケ年間、ニューヨークのコロンビア大学で教育史の研究に従事したが、その折この研究所を訪問して、その研究活動の意欲的なことを強く印象づけられた。その時の日本研究部の Director は日本近世史専攻の Dr, John W. Hall であった。彼の見事な日本語は、日本滞在十数年の成果だと自ら説明していたが、今回の訪問では彼はエール大学に移っていて再会が出来なく残念であった。また前回全く思いがけない再会で驚いたのは、旧制福岡高等学校の英文学の外人講師であった、Mr. Ronald S. Anderson がこのミシガン大学の Center for Higher Education の日本教育史担当の Assistant Professor で、この研究所の日本研究部でもスタッフの1人として活動していたことであった。彼も先年シカゴ大学に移り、更にハワイ大学の東西文化研究所へ移っており、これまた再会出来なかった。

実は筆者の今回のミシガン大学滞在は、この9年前の Mr. Anderson との2日間の交りの時、すでに心中ひそかに決意したことであった。それは Mr. Anderson から前回思いがけない情報を得て、次にもし米国に来る機会があれば、是非この研究所で調査をしたく考えたからであった。その情報とは、第2次大戦後の連合軍による日本占領時代のいわゆる GHQ の占領政策関係の原資料が講和条約成立による占領終結直後そのままこの研究所に移され、まだ未整理のまま保管されていると知らされたことであった。そして彼は私をその保管庫——木製の4段キャビネット2箇——の前まで案内して「これがそれであるが、何が入っているかまだ見当もつかない。近いうちに自分が一応の整理をする予定である」と話したのであるが、筆者は戦後の教育政策、教育立法の原資料があるはずだし、それは戦後教育史の研究にとり最重要な第一次史料となることを考え、ある戦慄をおぼえた次第であった。しかしその時は時間の余裕が全くなかったことと、未整理の重要文献検索についての手づきに或る困難を覚え、とうとう手を触れることも出来ずに退去した次第であった。その後いろいろな事情で Mr. Anderson と連絡もとれず、またこの資料を保管する Asia Library への筆者の問い合せに対する満足な回答も得ないまま、今回の訪問となったのである。

ミシガン大学のこの Asia Library は組織上は Far Eastern Studies 直轄の図書館であるが、実際はミシガン大学中央図書館 (University Library) の最上階の一角を占めて中央図書館運営の機構の中に包括されているようである。この Asia Library の Head の Mr. Yuki-hisa Suzuki および その下で日本語文献担当の Mr. Hiroshi Mori の特別の好意で、約2週間専ら日本占領政策時代の資料の検索に当ることが出来たのは感謝すべきことであった。しかし結果は次の様で満足すべきものではなかった。これはしかし筆者が不当な期待をもちすぎたためかもしれない。

(1) GHQ 資料は大部分昭和22~24年のものに限られていた。そして GHQ 解体時に自らの手で、あるいは CIA 方面の手かで、機密に属するものはすべて排除されており、筆者が期待

していた日本政府と GHQ の舞台裏の折衝の文書等は殆どなかった。ただ GHQ から日本政府へつきつけられたいわゆる「覚書き」のコピーのいくつかや、GHQ からワシントンへの報告の若干(昭和21年のも含んでいた)が見られた。

(2) 資料の大部分は、この期間国会で審議され法律となった議案の日本語と英文のコピーであり、それはあらゆる領域に亘り、この期間の立法のすべてであることが批判された。

(3) 教育立法関係は教育基本法、学校教育法はじめこの期間成立した教育法のすべてが含まれていた。そして特に注目すべき資料として、この期間 GHQ の CIE (民間情報教育局) の四国地方担当の係官 Mr. Karlinger の手持ちの資料一切がここにそのまま移管されており、あるものは手あかによごれ、重要なメモや附せんがつけられたり、英文の資料に交ってこの地方の日本人有力者の公的私的陳情書があったり、中央 CIE からの指示や担当者の報告書などすべてが生々しい資料ばかりであった。占領政策時代の地方教育再編成の苦悩が読みとれ、これこそ GHQ 関係資料中最も貴重なものと考えられた。

このミシガン大学の中央図書館は他大学のそれに比べ施設、設備はあまり上等とはいえないが、ゼロックス複写機3台が学生や教授たちの自由使用に供されており1枚10セントで大変便利で筆者も約20ドル分の複写をして持ちかえることが出来た。Asia Library の Head の Mr. Suzuki は昨年九大を訪問、北川前館長や船越事務部長と親しく対談する機会があったことを喜んでいて、Mr. Suzuki をはじめこの下に働いている Librarian の方々——米国人の外中国人、韓国人、日本人などそれぞれの分野を担当している——殆どが大学で M.A. をとりその上で Librarian の資格を重ねており、Mr. Suzuki は大学院学生たちに日本文献の解説なども担当し、その精力的な活動ぶりが深く印象づけられた。Mr. Suzuki の努力で長い期間中国文献のコレクションが断然優位であった Asia Library が次第に日本文献優位に代りつつあることもまた快い印象であった。

(いのうえ・よしみ：教育学部助教授；日本教育史)

◆ 会 議

日米大学図書館会議準備委員会のプログラム委員会

〈とき：昭和43年8月2日 ところ：東京大学総合図書館〉

本委員会は、さる6月24日に開催された第4回準備委員会で構成が決定したが、その初会合が開催された。委員館は大阪大学を委員長館に、国立：東北大学、名古屋大学、九州大学 公立：愛知県立大学 私立：明治大学、実践女子大学である。

宮地阪大館長を議長として、準備委員会委員長(伊藤東大館長)はじめ事務局側からも出席、次の各項について討議され、日本側スピーカーが選考された。

I. Introductory.

II. 高等教育のための大学図書館の役割。高等教育の特質に関する図書館資料。教育方法と図書館の利用。

III. 日米パネル方式による討議。

IV. 政府刊行物とその他入手困難な資料の収集。これに(資料交換)を加える。

V. 大学、研究図書館学と情報科学のための専門教育の問題。

VI. 日米間の人的交流。

VII. 文献処理と日本および米国の機械化された文献を output するための必要条件。

VIII. 日本および米国の図書館業務と情報検索へのコンピューターの適用、業務分析。地域的、全国的組織。大学間の協力。

IX. 会議の要約のための報告者、委員会と発展と協力のための新提案の提出。結論の採択。

◆ 研 修

学内図書掛長会議(昭和43年度第1～2回)

○第1回〈とき：昭和43年6月17日 ところ：本館新刊雑誌室 出席者：26名〉

協議事項 1：外国雑誌契約について

前回の会議(43.1.30)において、「本学における外国雑誌契約の諸問題」を審議したとき、

望ましい改善案作成のための問題点として、つぎの4項目(①係数について ②価格の統一について ③欠号補充について ④前金払の精算について)を指摘し、また、外国雑誌契約の基本をなす納入要項を新しく作成するために小委員会を設けることなどを決めた。(このことについては、「図書館情報」Vol. 4, No. 2を参照すること。)

今回の会議は、上記の問題点をもりこんで作成した「…年版外国雑誌納入要項(案)」の各項目の説明、および、この要項案をもとに事務局経理課と洋書輸入業者の代表者との折衝経過報告を中心として、討議がつづけられた。

ここでは、この折衝経過の詳細は割愛するが、問題点の一つである係数について、簡単に触れておく。

この係数は、ほかの3つの問題点とも密接な関連をもつ重要なものであるが、今回はとくに、係数統一の観点から、係数ひき下げについて、事務局経理課とともに、数回にわたって洋書輸入業者と折衝をつづけた。しかし、契約時期の関係もあり、また、業者の事情もある程度了承されたので、43年度の係数ひき下げは一応みおくることにしたが、今後は、各大学の実情をよく調査の上、係数ひき下げについて折衝をつづけるつもりである。

協議事項 2：製本設備について

従来から計画していた、本学の製本設備について漸く実現の見通しがついたこと、このための設備費として150万円振替要求していること、製本室開設の時期、および、製本委託業者などについて本館から報告した。これに対して、開設時期をできるだけ早めること、また、43年度の市内業者製本料金の決定などについて討議した。

○第2回くとき：昭和43年7月9日 ところ：文学部会議室 出席者：26名)

報告事項：製本設備について

実行予算としての製本設備費120万円が商議委員会(43.7.5)において承認されたので、早速製本機械発注などの製本室開設の準備に着手していること、また、昭和43年度市内業者の製本料金は昨年度の10%増しの料金をもって、現在事務局経理課と折衝中であることについて報告した。これに対して、前回でも紹介したように、製本室開設の時期、年間製本冊数について討議、また、製本料金の設定等についてはなるべく早く決定されるよう要望があった。

協議事項：外国雑誌契約について

今回も第1回にひきつづき、図書系の立場から立案、作成した「…年版外国雑誌納入要項(案)」の再検討と、契約上の問題点「係数」、「納入延期」、「郵送料」の項目をとりあげて研究討議した。以下、各項目の内容について簡単に述べる。

係数：第1回会議においても討議したが、今回は昭和44年版以降の契約への適用の目安に慎重に検討中であって、近く洋書輸入業者と係数ひき下げについて折衝するつもりである。また、昭和44年版外国雑誌契約にあたっては、係数のひくい業者へのきり換え手続きをできるだけ早い時期に行うことなどを申し合わせた。

納入延期：この問題は、前金払の精算時期とも密接な関連をもっており、また、図書館業務の簡素化にもつながる重要なことである。この会議としては、慎重に各大学の実情を調査の上、現在納入延期を認めていない本学の現状にたいして、納入要項案をもとに、事務局経理課と折衝をつづけるよう要望があった。

郵送料：この問題は、雑誌価格の不統一をきたす原因の一つをなしているため、昭和43年度の雑誌前金払から原則として郵便料は納入価格に含めないことを申し合わせた。

なお、改善案を作成するためには、今後数回の会議をもたなければならないだろう。

福岡県大学図書館協議会 福岡地区研究会 (第1回)

くとき：昭和43年7月16日 ところ：九州大学教養部第3会議室)

今年度は、九州大学教養部分館が当番館となり、第1回は参加館14館のうち、11館17名が出席して、各館提出の研究課題を審議した結果、つぎのように選定した。①分類表の検討(使用に際しての心構えおよびUDCの使用について)②大学図書館の業務分析について(テキスト：全国国立大学図書館長会議 大学図書館の業務分析)。このあと、9月から4回にわたって研究会を開くが、第2回研究会においては、本学教養部英語科林哲郎教授の講演(演題：英国初期の印刷・出版事業について)をきく予定である。

曝書の今昔

西村 健次

陽性型とさえ予報され、一時は水飢饉で断水騒ぎまで引き起こした今年の梅雨は、おそ蒔型でもあったものかなかなか執念深く降り続いた。このような温暖期の長雨ほど我々書庫守を悩ますものはない。高温多湿の庫内環境は、紙が主材料である図書資料類の保存管理の上で一番厄介な季節である。またこのような湿潤期の庫内状態は、紙を蝕む昆虫類の生息環境を最も良好にし、繁殖・蔓延を助ける絶好期でもある。わが文学部は約25万冊（和・洋書）近くの図書を蔵しているが、研究分野の性格からか和装本が比較的多く、その25%を占めている。これらと和装本は紙を食する昆虫類の好餌となる和紙を材料とするため、害虫の巣窟となり食害を蒙り易い、特に和装本には稀観書・古記録等、現在求めようとしても得難い貴重本が多く、これが保存管理には随分永い間悩まされつづけてきた。そしてこれが防害対策としてとられてきた唯一の方法は、直接虫を殺す積極法でなく虫類の生息環境を変化させ繁殖・蔓延を抑制する程度のごく消極的な、旧態依然たる曝書に頼ってきたのであった。このような消極戦法での防害対策では十分な殺虫効果を達することは出来なかった。ために年々激増する虫害を憂慮しつつ新しい防害対策の研究・開発に意を注がれてきたのであった。幸い数年前、文科系学部の新館が竣工し、その図書館設備の一つに図書の害虫駆除装置として「SK 式真空消毒装置」が加設され、その後の虫害駆除作業は著しく効果的、かつ能率的となり、過去数十年来懸案とされていた虫害防除に一大転機をもたらし、着々その成果を挙げつつあることは周知のとおりである。もはや今後は虫害による貴重な文化資料の損失は、皆無であるといっても過言ではあるまい。この装置の強烈な殺虫威力は（1回消毒冊数約800冊・時間約140分）科学化された近代機械力と、旧態依然たる曝書とには正に隔世の感がある。すでに過去のものとなった曝書作業を思い起すとき、あの炎暑の中、汗と埃にまみれて露出皮膚に奇怪な炎症（にじみ出る汗に書物の埃と昆虫の廃産物でもあろう虫粉との混合粉剤が皮膚にまつわると、やがて炎症を起し堪えられない痒味に襲われ皮膚が潮紅する）を起しその苦痛と戦いながら防除作業に懸命であった当時のことが記憶の底から甦ってむしろ懐しささえ覚える。その頃の記憶の一つを思い出すまに曝書の過去をしのんでみよう。

これはかなり以前のことであるが曝書作業を開始して間もないある日、殊にその日は流汗滝なす酷暑でアルバイト学生の作業員など殆んど半裸の軽装であった。しかも特に埃の多い書物の曝書でもあった。まず書物の搬出、それから埃払い、次いで兼ねて部屋に張られた曝書用の紐へ一冊一冊跨らせて吊す作業、後は机上といわず床といわず本の表紙に押えの小石など乗せて、扇状に開くよう並べ干す作業となる。その頃になると辺り一面埃の渦が舞う、半裸の皮膚は満遍なくテラテラ汗光りさえしている。払い落された埃は風に煽られ汗ばんだ肌へ容赦なくまつわり、またたく間に全身汗と埃でどす黒く汚れが目立つようになる。その頃からぼつぼつ皮膚に症状が表われ至るところに痒味が起る。搔けば潮紅し発疹さえ生じよいよ堪えられなくなる。このような苦痛と戦いながら漸く作業が一段落し休憩する。誰いうとなく水泳プールでの水浴を提案した者があった。勿論賛否は論ずる要のないことで即座に満場一致賛成、早々に出かけることとなった。実は一挙両得の名案である。到底洗面器などでは洗い落とすことの出来ない全身の汚れを洗うことと、暑さを癒す納涼とを兼ねた目的を達し得るからである。殆んど全員打ち揃って程遠からぬプールへ出かけた。プールは満々と水を張って碧く澄んでいて実に快適であった。適当に涼をとり体を洗って爽快な気分で帰りかけたところを管理人か部員でもあったであろう人に捕ってひどく叱られたことがあった。実はこのプールの水は試合前に変えたばかりであったと聞かされ、恐縮してお詫びもそこそこにほうほうの体で帰って来た始末だった。後で上司から謝罪してもらったと聞いて身の竦む思いで赤面したのであった。このような思い出を残して曝書は最早や過去のものとなったのであるが、その労苦の値として現存する資料類が、今なお多少の虫害を蒙りながらも学術研究・教育の上で重要な役割を果たしつつあることはこの上もない幸である。そしてこれら資料類が次の世代、否永久に伝承せられ人類社会の進歩発展のうえに貢献するであろうことを思うとき、限りない喜びを禁じ得ないのである。そして目立たない裏方仕事である我々書庫守の職務が、いかに尊く価値あるものかを再認識し、独りその誇りと喜びをしづかに噛みしめながら、机上に開かれていた貴重書を舐に仕舞い納めたのであった。

(にしむら・けんじ；文学部図書掛長)

学内図書館めぐり

医学部図書館の沿革 (9)

分館時代 (3)

この沿革史も遅々たる歩みではあるが、四期、医学部分館時代（自昭和32年—現在）の3回目にすすみ、やがて終章も近いことである。新分館建築以来、今日まで12年間、3代の分館長更迭を経て、今年4月には4代目の新分館長（田中潔教授：薬理学）を迎えているが、本稿の时限としては3代目の倉恒分館長（公衆衛生学）までにとどめておきたい。さらに本稿では便宜的に、分館長別の主な事項、業績だけをひろって記述をすすめこの沿革の終章としたい。

○ 問田分館長時代（31年7月～36年7月）——問田教授（生理学第一講座）は、本省発令の初代分館長として5年間にわたり、新しい医学図書館の基礎造りに尽力された。

1. 32年6月4日：第1回の図書委員会で、新分館の運営規則が審議された。ちなみにこの運営規則は同年9月の教授会（585回）において承認された。

2. 32年6月14日：第5回九州地区医学図書館協議会の当番館となった。当分館からの議題は当時開始して間もない複写（マイクロ・フィルム）サービスの運営方法（国庫納入）についてであった。この議題はこの秋の第28回全国総会（於群馬大学）にも九州ブロックの共同提案とされた。

3. 33年7月：分館長の改選で問田分館長が再選が決定した。

4. 33年9月：第6回九州ブロックの総会（於長崎大学）で九大の当番館（第30回日本医学図書館協会総会）受託について、九州ブロックの各館が協力的体制で支援することが決議された。総会の当番館となることは、その夏、協会中央事務局から要請されていたものである。九大が新館建築後2年目だからその披露をかねてという理由もあった。

5. 34年5月：第7回九州ブロックの総会（於鹿児島大学）で、この秋の第30回全国総会の開催期日、行事スケジュール、予算、協力支援の具体案などが内定した。

6. 同年11月17日～19日：第30回日本医学図書館協会総会開催、出席正会員45館、オブザーバー4館であった。当時の問田当番館長は、この夏腰を痛めて入院中だったが、総会中の3日間は議長として12議題を明快にさばいて、よくその責務を果たされた。

7. 35年4月：この年度は分館の内容充実（特に研究面）に力点がおかれた。このことを具体的に示すものとして、同年5月、第50回図書館商議委員会に提出された予算振替要求の中にも「医学部分館は開館以来約3カ年を経て、本格的図書館業務を行い成果をあげている。第3次計画である書庫増築（現在の倍増）も近く実現の運びとなり、建物施設は当初の計画規模を完成することとなる。したがって今後は内容を充実整備しなければならない。そのため当然運営経費を増加しなければならないので……」と述べており、所要額調の中では、雑誌費の増額が次のように明らかにされている。

内国雑誌 85種（+3）（+27,400円）

外国雑誌 162種（+61）（+621,000円）

註：カッコ内は前年度との比較である。

8. 同年7月：野中文庫の新設があった。故野中春三氏（前西鉄社長）の遺族から香典返しの意味で20万円の寄附をうけたので、学生用の参考書、教科書類が購入された。これを野中文庫として2階閲覧室のオープン書架に備え付けた。

9. 同年同月：分館長の改選で問田分館長の三選が決定した。

10. 36年2月：書庫の増築（195坪）が完成した。これまで第3期工事として書庫の増築と資料展示室の整備が残されていたことは、沿革(7)でもふれておいたが開館後約4年ぶりに本省予算でなく、前出チャイナ・メディカル・ボードの好意による追加援助金4万ドル（1,440万円）によってまず書庫の増築が完成した。

11. 同年3月18日：書庫増築の完成祝賀会で問田分館長から経過報告と共に今後の資料中央化への協力要請があった。これを機会にそれまで一部の教室を除いて、各教室に分散所蔵されていた和洋雑誌のバックナンバーおよび単行書（新刊書を除く）が分館新書庫に移管された。もちろん全体の中の一部にすぎなかったが、このことは資料中央化への一歩前進であった。

12. 同年7月：分館長の更迭。問田分館長は三選後一年にして教養部長となり、後任は宮崎一郎教授（寄生虫学）が発令された。

図書館統計

部局別蔵書冊数

(昭和43年5月1日現在)

部局名	種別			部局名	種別		
	和漢書	洋書	小計		和漢書	洋書	小計
中央図書館	187,707	41,294	229,001	農学部	87,858	89,232	177,090
中文部	163,709	78,737	242,446	教養部	76,688	30,935	107,623
教育学部	16,528	17,822	34,350	温泉治療学研究所	2,894	2,196	5,090
法経学部	59,298	80,746	140,044	応用力学研究所	7,080	5,864	12,944
経済学部	60,041	44,543	104,584	産業労働研究所	9,165	2,125	11,290
経理学部	18,999	47,793	66,792	生産科学研究所	2,638	2,065	4,703
医学部	75,048	91,498	166,546	工業教員養成所	2,456	385	2,841
薬学部	2,297	3,013	5,310	事務局	1,953	255	2,208
歯学部	1,551	1,115	2,666	合計	851,384	656,850	1,508,234
工学部	75,474	117,232	192,706				

昭和42年度部局別受入冊数

部局名	種別			購入			寄贈			製本・その他			合計
	和	洋	小計	和	洋	小計	和	洋	小計	和	洋	小計	
中央図書館	1,912	170	2,082	906	827	1,733	1,082	265	1,347	5,162			
中文部	2,986	2,003	4,989	564	329	893	396	369	765	6,647			
教育学部	874	950	1,824	56	80	136	122	124	246	2,206			
法経学部	1,140	3,899	5,039	183	70	253	329	193	522	5,814			
経済学部	2,533	1,461	3,994	714	20	734	312	135	447	5,175			
経理学部	1,046	2,400	3,446	37	43	80	121	879	1,000	4,526			
医学部	1,219	883	2,102	308	327	635	911	1,410	2,321	5,058			
薬学部	184	234	418	18	2	20	41	227	268	706			
歯学部	58	13	71	0	0	0	0	0	0	71			
工学部	3,785	3,449	7,234	148	42	190	686	1,528	2,214	9,638			
農学部	2,598	1,946	4,544	128	83	211	610	917	1,527	6,282			
教養部	4,003	1,979	5,982	381	178	559	11	2	13	6,554			
温泉治療学研究所	113	2	115	3	0	3	51	99	150	268			
応用力学研究所	266	215	481	0	0	0	211	216	427	908			
産業労働研究所	623	147	770	318	2	320	99	26	125	1,215			
生産科学研究所	51	62	113	7	0	7	1	44	45	165			
工業教員養成所	136	6	142	0	0	0	2	0	2	144			
事務局	139	18	157	0	0	0	0	0	0	157			
合計	23,666	19,837	43,503	3,771	2,003	5,774	4,985	6,434	11,419	60,696			

昭和42年度部局別受入雑誌種類数

部局名	種別			購入			寄贈			製本・その他			合計
	和	洋	小計	和	洋	小計	和	洋	小計	和	洋	小計	
中央図書館	306	80	386	912	169	1,081	0	0	0	1,467			
中文部	141	258	399	1,035	74	1,109	0	0	0	1,508			
教育学部	89	153	242	226	43	269	0	0	0	511			
法経学部	71	191	262	244	19	263	0	0	0	525			
経済学部	127	120	247	369	39	408	0	0	0	655			
経理学部	118	570	688	495	744	1,239	0	0	0	1,927			
医学部	234	772	1,006	292	164	456	0	0	0	1,462			
薬学部	24	102	126	47	16	63	0	0	0	189			
歯学部	27	31	58	10	13	23	0	0	0	81			
工学部	342	1,043	1,385	458	43	501	1	0	1	1,887			
農学部	67	27	94	81	22	103	0	0	0	197			
教養部	187	220	407	8	9	17	0	0	0	424			
温泉治療学研究所	46	68	114	90	31	121	0	0	0	235			
応用力学研究所	43	114	157	0	0	0	296	103	399	556			
産業労働研究所	61	12	73	213	2	215	0	0	0	288			
生産科学研究所	7	60	67	170	10	180	0	0	0	247			
工業教員養成所	8	9	17	0	0	0	0	0	0	17			
合計	1,898	3,830	5,728	4,650	1,398	6,048	297	103	400	12,176			

九州大学附属図書館月報「図書館情報」Vol. 4, No. 8. (通巻36号)

1968年8月25日発行・発行人 船越 惣兵衛

発行所 九州大学附属図書館・福岡市大字箱崎3576・〒812・電話代表④1101 内線5301